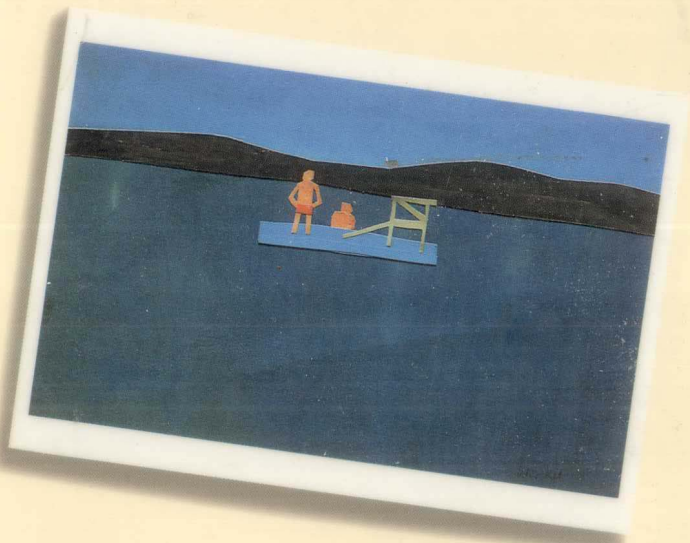




夏と少年の短篇
片岡義男

夏と少年の短篇
片岡義男

夏と少年の短篇

第一刷発行——1992年10月7日

著者——片岡義男 ©Yoshio Kataoka 1992, Printed in Japan

発行者——小高民雄

発行所——東京書籍株式会社

東京都台東区台東1-5-18 電話3942-4111(営業)3942-4173(編集)

印刷製本——図書印刷株式会社

ISBN4-487-79035-2 C0093

TOKYO SHOSEKI PRESENTS.

夏と少年の短篇 目次

私とキャッチ・ボールをしてください 7

夏はすぐに終る 39

あの雲を追跡する 71

which 以下のすべて 113

おなじ緯度の下で 137

永遠に失われた 169

エスプレッソを二杯に固ゆで卵をいくつ? 199

*cover illustration
book design*

アレックス・カッツ
関さゆり

夏と少年の短篇

私とキャッチ・ボールをしてください

金曜日の午後、高等学校からの帰り道、いつも乗る私鉄の十二両連結の電車のなかほどの車両から、三年生の伊藤洋介はプラットフォームに降りた。どの車両からも、何人かの乗客が、それぞれになぜか疲労した様子で外へ出てきた。線路をむこうへまたぐ木造の建物が、プラットフォームの端にあった。誰もがそこにむけて歩いた。

歩きながら伊藤洋介は空を仰いだ。梅雨のあいまの曇った日だった。空は均一に灰色だった。空を見渡したあと、彼はふとふりかえった。おなじクラスの女性が歩いて来るのを、洋介は見た。遠山恵理子という名の女性だった。

洋介の視線が彼女の目と合った。恵理子は淡く微笑した。いつ見ても静かに落ち着いた雰囲気を保っている、聡明そうな美少女だ。洋介は立ちどまった。恵理子を待った。そしてふたりは肩をならべて歩いた。恵理子と洋介はおなじ背丈だった。

発車した電車は駅を出ていき、すぐむこうにある一級河川にかかる鉄橋にむけて、走り

去った。

「いつもここで降りるの？」

洋介がきいた。

「そうよ」

「知らなかった」

「私は知ってたわ」

「どうして？」

「何度も見かけたから」

木造の建物の階段を、ふたりは上がっていった。線路を越え、反対側の階段を降りた。

駅の北口からふたりは外へ出た。

洋介が母親とふたりで住んでいる部屋のある建物まで、駅から歩いて十分かからなかった。部屋のある位置を洋介は恵理子に説明した。恵理子も家の場所を教えた。ふたりが住んでいる場所は、歩いて五分ほどの距離だけ離れていることが、おたがいにわかった。

駅前から続いている商店街を、ふたりは抜けていった。やがて正面にT字交差が見えた。

「あそこを僕は右へいく」

と洋介は言った。

「私は左です」

恵理子が答えた。そして、

「川へいってみましょうよ」

と、彼女は言った。

ふたりはT字交差を右へ曲がった。住宅地のなかを道なりにまっすぐいくと、やがて川の土手が正面に見えた。その高い土手に造ってある階段を上がった。

土手の道に立つと、川幅が広いところで三百メートルはある川のぜんたいを、左右へ視界いっぱいに見渡すことができた。都市部を流れる川の平凡な光景が、その視界のなかに続いていた。

土手の上の道をふたりは川下にむけて歩いた。このあたりの川原は国が管理する公園施設となっていた。粗末なバックネットの立つ野球のグラウンドがふたつ、土手に添ってならんでいた。手前のグラウンドでは、会社勤めに見える人たちが、試合をおこなっていた。隣のグラウンドに人はいなかった。

恵理子と洋介は立ちどまって試合を見た。

「練習試合だね」

洋介が言った。

恵理子は洋介に顔をむけた。彼の横顔を見てひと呼吸だけ置き、

「野球の選手だったのですって？」

と彼女はきいた。

洋介は苦笑した。

「ずっと以前だよ。リトル・リーグ。僕はキャッチャーだった」

洋介の返答に、恵理子はうれしそうに微笑を深めた。洋介は子供の頃もいまとおなじく、細身の優しそうな少年だった。しかし、外見が人にあたえる印象とは大きくちがって、彼は頼りになる優秀なキャッチャーだった。

「なぜ知ってるの？」

洋介はきいてみた。

「クラスの人が言っていました」

土手の道をさらにしばらく川下へ歩き、やがてふたりはおなじ道を引き返した。練習試合がおこなわれているグラウンドの上まで戻って、ふたりはしばらく試合を見た。

「もう野球はしないの？」

恵理子がきいた。

洋介は首を振った。

「ゲームは楽しいけれど、最後は勝ち負けになってしまいうから」

「明日の土曜日は、なにをしてるの？」

「なにもしてない」

「私とキャッチ・ボールをしてください」

「キャッチ・ボールを？」

「ええ」

「きみが？」

「そう。私が」

「キャッチ・ボールを」

「してください」

「雨は降らないかな」

「だいじょうぶよ」

「グラブは？」

「持ってます」

「野球のボールなんか、僕はもうずいぶん投げてないよ」

「ひさしぶりに」

「そうだね。よし、明日はキャッチ・ボールをしよう」

「午後、このあたりで」

きれいに澄んだ熱意が、彼女の口調のなかをまっすぐにとおっていた。

「二時くらいかな」

「そうね」

「ここで会おう」

という約束をした日の夜、洋介はグラブを捜してみた。子供用のキャッチャーズ・ミットが、かちかちになって現れた。大人用のグラブもひとつ見つかった。遊撃手が使うグラブだった。人にもらったものであることを、洋介は思い出した。みすばらしく古びていた。ボールはどこにも見あたらなかった。

次の日は晴れた。午前中、十時前に、洋介は部屋を出た。電車で都心へ出て、スポーツ用品のディスカウント・ストアへいった。野球用品の売り場で、キャッチャーズ・ミットの本格的なものをひとつ、彼は選んだ。ボールも買おう、と彼は思った。硬式と軟式とのあいだで、彼は少しだけ迷った。それぞれを手にとった彼は、どちらをも遠山恵理子のイメージに重ねてみた。恵理子は軟式のボールではなかった。だから洋介は、「プロの試合にも使用されています」と能書きの添えてある硬球をひとつ、ミットとともに買った。

お昼過ぎに彼は部屋に戻った。母親の小夜子が昼食を作っていた。彼はそれを途中から手伝った。

「野球のグローブを買いにいったの？」

小夜子がきいた。

「グラブ」